

莊園公領における戸主・戸をめぐる存在形態

奥　野　義　雄

はじめに

律令制国家社会における土地は公地、百姓は公民と規定されていたが、八世紀中頃に制定された墾田永世私財法が莊園形成の原動力になったことは確かで、周知されている事象であろう。

とくに、公民である戸主や戸（戸口含む）については、先学諸氏によって戸籍制の視点から、また古代村落および家族制の観点から論究^①されてきた。そして、戸主・戸の口分田・墾田の所有状況や口分田所有者戸主ならびに墾田所有者戸主・戸に関する史料上の疑問点などを含めて古代農民と村落についての論及^②もある。

だが、公民であった戸主や戸（戸口）がその後どのようにして存在し続けたのか、否かについては、先学諸氏の論稿で提示されているとは考えがたい。単に公民の莊民（浮浪・田堵・寄人などを含めて）へ転化したというのみでは解決したとはいいがたいであろう。

ただ、論及の主題と関係する事柄として家宅地である戸主と関連する史料として長承二（一一三三）年十一月二十九日付の「伊勢国大国莊專当解」の閑丸元並らが「戸戸給主」「号戸田」という文言を示した清水三男氏の論稿^③、負名体制と関連づけて陵戸姻の田坪々を記載する康保元（九六四）年十一月十三日付の「醍醐寺牒案」の史料を掲げた平田耿二氏の論稿^④などには、律令制下の戸主や戸が平安時代後半まで存在し、戸給主や戸主・戸の状況が語ら

れている。これらの論稿は戸主や戸が平安時代中頃から後半に至るまで存在し続けていることを提示してくれる。だが、これ以外に戸主や戸にかかわる史料とその動向については、断片的な史料のみでは測りがたいといえよう。そこで、戸主や戸に関する史料の抽出と史料から戸主や戸の存在形態や実態について検討していくことにしたいが、次にまず戸主や戸と家宅地についての史料から考えていくことにしたい。

註

(1) 戸主と戸（戸口）と関わる戸籍制・班田制・家族制・

村落についての主な論著のみを次に挙げることにしたい。

岸俊男『日本古代籍帳の研究』

虎尾俊哉『班田收受法の研究』

平田耿二『日本古代籍帳制度論』

中野栄夫『律令制社会過程の研究』

清水三男『上代の土地関係』

宮原武夫『日本古代の国家との農民』

(2) 弥永貞三『奈良時代の貴族と農民』

(3) 清水三男「宅地『戸主』について」（前掲書所収）

『平安遺文』第五卷、第二三〇七号文書

(4) 平田耿二「古代から中世へ」（前掲書所収）

『平安遺文』第一卷、第二八三号文書

補註 次の著書にも関連する論著があり、掲げておくことに

したい。

泉谷康夫『律令制崩壊過程の研究』（とくに「現存平

安時代戸籍の考察」）

松本新八郎『中世社会の研究』（とくに「名田經營の

成立」）

第一章 律令公民用語「戸主」の家宅地・田畠地用語への変換

律令制国家における公民制の戸主や戸とは異なり、家宅地を対象にして「戸主」と呼称することは、すでに清水三男氏によって論究されている。清水氏が論及する論旨で注視すべきことは、「貴族には邸宅造営の費用さへ、諸国の正税を割いて給されたこと」と「百姓に対しても（中略）、若干の配慮が払われてゐることを思えば、（中略）、

新京の市民なる者には宅地を給された」という言及^①を掲げられた『続日本紀』の記載（為造新京之宅、以諸国正税六十八万束、賜右大臣以下參議已上及内親王夫人尚侍等）「百姓私宅、新京宮内亦五十七町、以当国正税四万三千束、賜其主」には、「戸主」が家宅地であるとする傍証は提示されていない。

また、清水氏は同論稿で家宅地が戸主であるとする例証として、延喜十二（九一二）年七月十七日付の「七条令解」の売買家券文の「合壹区地四戸主在二坊十五町西一行北四五六七門」という文言^②と平治元（一一五九）年八月二十日付の「沽却進 私領地壹処事」^③「合壹戸主余參丈東西五丈一尺 南北十丈四尺」という文言（右件地元者、源吉貞所領也）の記載もみえる）を掲げているが（傍点―奥野、以下同様にて略す）、延喜十二年の一区地の四戸主は売買の家宅であり、平治元年の家宅地はもともと私領（所領）地であつたことがわかる。

ところで、〈家宅地〉と〈戸主〉が同一の内容を表現する時期は九〇〇年代初期から一一〇〇年代中頃に至るまで続いていたことを諸史料が示してくれる。

このことについて、あらためて九〇〇年代以前に家宅地が戸主であると認識・表現されていたものを、いくつかの史料を繙いて検討することにしよう。これによって、家宅地が戸主と呼称されはじめた時期を導き出せるとともに、従来の〈戸主〉〈戸口〉の認識変化が窺えるものと考えたい。

清水氏が掲げた延喜十二年と同様に、天曆三（九四九）年四月九日付の「七条令解」にも記載されている「申立売買地券文」^④「合地四戸主在左京七条一坊十五町西一行北四五六七門」という文言から家宅地の名称に戸主が用いられ、この年以前の史料に家宅地すなわち戸主という文言はみられない。

この戸主を地積と理解する清水氏は、すでに掲げた平治元年の「平遠正家地売券」の「合一戸主余三丈者東西五丈四尺 南北十丈四尺」という文言から、戸主の広さを推定し、「戸主という宅地の広さの単位は、都城に於ける朝臣の邸宅地配分の時に定められたもの」と言及^⑤しているが、〈戸主〉が家宅地の広さ（地積）を表現したものかは明らかでないとい

いえよう。

戸主が家宅地の広さの単位として「一戸主余参丈」という表現を示す欠年銘（鎌倉期か）の「八条院御地事」の「八条東洞院西一町」「梅小路南高倉東一戸主」「八条院北東洞院東十余戸主」という文言（傍点は清水氏による）を掲げた清水氏の判断には疑義を提示したい。

なぜならば、承安三（一一七三）年三月十一日付の「阿闍梨某屋地売券」の

合戸主余四丈者東西五丈二尺
南北十丈四尺

在左京自大宮西自塩小路北小路面

右件地、元者前武者所平遠正所領也、（中略）、限直能米百五十石、沽却藤井孝兼既畢、全以不可有他妨、

（下略）

という記載と、さきに掲げた「平遠正家地売券」の「合一戸主余者東西五丈四尺
南北十丈四尺」という文言^⑨には一戸主の一丈と東西一尺の誤差がある。この誤差を誤字とするならば問題は解決するが、誤差があると考えるなら「一戸主」の広さの単位に問題が生じ得ることになろう。

また、安元二（一一七六）年六月 日付の「藤原氏女屋地売券」の

合一戸主者東西二丈五尺一寸
南北十九丈八尺

在左京八条一坊十六町西一二行五六七八門内

（下略）

という記載^⑩があり、この家地売買の場合の「一戸主」は東西二丈五尺一寸・南北一九丈八尺ということになり、「一戸主」の広さ（地積）はその場所ごとに変わる単位（数値）と理解せざるを得ないことになろう。

これと同様なことを示してくれる家地売買の史料を一つ挙げることにしよう。それは、元暦二（一一八五）年八

月二日付の「大江某家地売券案」にみえる

合一戸主余二十五丈者口東西四丈一尺
奥南北十七丈四尺

在左京綾小路南東洞院東綾小路西目西角十丈次也

右件地、相伝私領也、限直能米六十石若狹本斗御料□御領所沽進也、(下略)

という記載^①であり、所在地ごとに一戸主の広さの単位(数値)が変化することになる。

このことによって、〈一戸主〉は広さの単位としての解釈は成り立たないことになり、広さの〔単位〕が所在地によって変化することはないといえよう。

では、一戸主が広さの単位でないならば、家宅地を「戸主」と呼称する前提条件(要因)とはどのようなものであろうか。ただ、それ以前に前提条件となるものが存在していたものか、否かを考えなければならぬであろう。

そこで、家宅地と戸主と戸とかかわる史料を三例ほど掲げることにした。

まず、承和八(八四一)年十月九日付の「石川宗益家地売券」をみると

□在五条上堤田久里五坪□百歩
□六坪一段百八十歩林 七坪二段林

(中略)

在物・三間檜皮葺板敷屋一間在庇三面 五間檜皮葺屋一字在□
五間板屋一間在□面 檜皮葺中倉一字 檜皮葺板倉一

(宗九)

右、得左京六条一坊戸主・從五位下石川朝臣□益牒傳、件家以新錢二十貫文充価直、与売常地左京六条三坊戸主
正六位上稻城壬生公德繼戸口同姓物主既訖、(下略)

とあり^②(傍線―奥野、以下同様にて略す)、三間檜皮葺板敷屋や五間檜皮葺屋などを含んだ家宅および家宅地(含

莊園公領における戸主・戸をめぐる存在形態

林・熟地)を、〈戸主〉である石川宗益が戸主稻城公德の〈戸口〉に売却したことが窺える。

次に承和十四(八四七)年六月二十七日付の「山城国宇治郡司解」の

合家一区 地一町熟地五段
林五段

在五条上堤田外里五坪三段二百步熟地

六坪一段百八十步林 七坪二段林

(中 略)

在物三間檜皮葺板敷東屋一字已破

右、得左京六条三坊戸主・從六位上稻城壬生公鯨戸口同姓物主欵状稱、己家地以古錢五十貫文充価直、与壳左京

三条二坊戸主・從五位下百済王永仁戸口從五位上百済王永琳既畢、(下略)

という記載¹³⁾によつて、〈戸主〉の稻城壬生公鯨の〈戸口〉の物主は家宅地を〈戸主〉の百済王永仁の〈戸口〉である永琳に売与したことがわかる(買主の戸口が從五位上であるのに対して戸主は從五位下であるが、戸主より戸口の階位が上であることに興味をもつ)。

さらに、嘉祥二(八四九)年十一月二十日付の「山城国高田郷長解」をみると

^(寫)□田郷長解 申売買家地立券文事

合一段 在三条高粟田里十六坪

(中 略)

右、得川辺郷戸主・正八位上秦忌寸冬^(守)□戸口同姓鯛女欵状云、(中略)、常地沽与高田郷戸主・正六位上秦忌寸殿主之^(マ)

戸口春宮史生大初位同永岑既畢、(下略)

という記載¹⁴⁾があり、この史料にも家宅と〈戸主〉〈戸口〉の売り手・買い手が関連していることを示唆してい

る。

このような九世紀中頃の家宅地の売買に戸主や戸（戸口）がかかわる事態は、家宅地を戸主と呼称する基因の存在を示唆しているのではないだろうか。だが、戸主や戸（戸口）による家宅地の売買行為とは無関係であり、戸主が家宅地の広さ（地積）を示すものでないならば、家宅地と戸主とのかわりはいかなる要因によるものであろうか。

ところで、私領地である家宅地と若干異なるが、田畠の私領地と戸主や戸などが関連するものか、否かについて諸史料を繕きながら検討しておきたい。次に田畠領地と戸主や戸などとの関係の有無について考えていくことにしよう。

まず、天長十（八三三）年二月三十日付の「近江国大原郷長解写」をみると

合墾田一段百歩 直叻五石六斗 大原一条四里六莖□

売人横川駅家戸主大初位下山前連魚鷹戸口同姓広繼

今得買人浅井郡湯次郷戸主從七位上の臣吉野戸口中嶋大刀自古云、

右件墾田、依己所負官物、限永年与沽上件大刀自古既畢者、（下略）

という記載があり、戸主山前連魚鷹の戸口広繼の墾田一段一〇〇歩を戸主的臣吉野の戸口大刀自古へ売却したことがわかる。

また、仁寿四（八五四）年十二月十一日付の「近江国大原郷墾田売券」には

近江国愛智郡大郷戸主依知秦公年主戸秦忌寸五月麻呂解 申依庸米売買墾田立券文事

十一条八里門田一段戸主依秦公益繼戸同平刀自女土

右件墾田、所負庸米二石充価直、切常土売進東大寺衙既訖、（下略）

莊園公領における戸主・戸をめぐる存在形態

とあり、戸主益繼の戸平刀自女の墾田（門田）一段を東大寺に売却したことが窺える。この大国郷は、後世に東大寺領大国荘になっていく地域である。

そして、延喜九（九〇九）年七月十七日付の「左京秦岑吉畠売券」をみると

左京五条三坊戸主秦忌寸岑吉解 申進売畠立券文事

合四段 在十三条小野田東里二十五坪

（中 略）

右畠、元是岑吉之故親父成繼之私地、而今為成公事、宛見直、与売右京三条四坊戸主前豊後大目従六位上大秦宿称相益戸口同姓行康、限永年所与売如件、（下略）

という記載があり、戸主秦岑吉は畠地四段を戸主大秦相益の戸口行康に売却したことが窺える。

この戸口大秦行康は左京十三条小野田東里二十五坪に近い十三坪を買い入れている。すなわち、承平二（九三二）年十二月三日付の「右京朝原宿称有岑解」の「右京三条三坊戸主正六位上朝原宿根有岑解」⁽¹⁷⁾「合二段畠百八十歩」「在山城国葛野郡上林郷小野村十三条小野田東里十三坪北山本」⁽¹⁸⁾「与売右京三条四坊戸主前豊後大目従六位上大秦宿称相益戸口同姓行康」という文言がそれであり、戸口が他の戸主の田畠を買っていることがわかる。

このような戸主あるいは戸（戸口）による田畠売買は、九世紀中頃から一〇世紀中頃に至る事象と現段階では考えるべきかもしれない。なぜなら、一一・一二世紀段階には家宅地および田畠と戸主・戸（戸口）との関連を示す史料はほとんどないが、一三世紀段階になると人名に冠する戸主や戸の呼称に代わって田畠自体の呼称として戸主（この段階からは戸・戸口の呼称はない）が表現されるようになる。その二・三例を次に挙げていくことにしよう。

まず、天治二（一一二五）年十二月十九日付の「大法師某田地売券」には

沽却 内田一処事

合二戸主但四町

右件内田、職掌近貞所領也、(中略)、其之後有直要用者、真如房限永代所売渡進、沙汰券文如件、⁽¹⁹⁾とあり、もともと近貞の所領であつた内田二戸主(四町)を大法師某が真如房に売り渡したことがわかり、二戸主が四町であれば一戸主は二町となることも窺える。

この内田二戸主Ⅱ四町と同様な田地売買が、健保四(一二一六)年十月六日付の「安部氏女田地売案」にみえる。すなわち、

沽却進 内田一処事

合二戸主但四町九条坊城辰巳角東繩本

右、件内田者ハ、安部氏女相伝私領也、而依有要用、(中略)、永代ニ佐伯国安・日置氏女兩人ニ所却実也、⁽²¹⁾(下略)

という記載があり、安部氏女は四町になる二戸主の内田を佐伯国安と日置氏女の二人に売却したことが窺える。

また、文永九(一二七二)年四月二十七日付の「頼瑜戸主売券案」をみると

沽却 私領地事

合二戸主者(割註略)

(中 略)

右、件地者、相具次第相伝之券文等、自己母禅妙手、所讓得也、(中略)、所沽却堀河女房也、(下略)とあり、⁽²¹⁾阿闍梨頼瑜が母より譲り得た私領地を堀河女房に沽却したことがわかる。譲り渡した二戸主には「四町」という文言もないために何町の地積かは明らかでないが、恐らく二戸主Ⅱ四町であつたかもしれない。

そして、弘安三(一二八〇)年十月二十日付の「大中臣松寿丸田売券」には

定 永財沽渡進私領田地立券文事

合・四・戸・主・者

(中 略)

右、件田地者、(中略)、従外祖母浄如房之手、処分給之後、進退領知之間、(中略)、永所沽渡進於仮名礒部枝久実也 (下略)

という記載²²がみえる(「領主大中臣松寿丸」の署名と花押が文末にある)。この田地売券の私領田地は四戸主(八町か)で、売主の松寿丸は「領主」と明示している。この領主はもともと松寿丸の外祖母浄如房であり、浄如房が処分(譲渡)によって松寿丸が四戸主の領主となったことが窺える。

このように田畠の広さ(地積)を示す一種の単位のように〈戸主〉が用いられている。この事象はすでに九世紀中頃から一〇世紀中頃に至るまで現われる家宅地の売買主である〈戸主・戸(戸口)〉とは相違して、一二世紀前半から一三世紀後半に至る時期の〈戸主〉が家宅地の広さを示す状況と類似している。

ただ、〈戸主〉を家宅地の広さと認識される時期は一四世紀にまで及んでいることが次の史料からわかる。すなわち、乾元二(一三〇三)年六月五日付の「蓮心家地売券」をみると

沽却 しりう地一所の事

合三戸主余者 ちやうすほんけにみえたり

(中 略)

右、くたんのちハ、三条殿、御つほねより、かいりやうして、ちきやうさうあなし、しかるを、ゑうようあるによりて、(中略)、ほんけんてつきらをあいそへて、あいわう女に、うりわたし候をハぬ、(下略)

という記載²³がそれであり、蓮心は三戸主余の私領家宅地をあいわう女に売り渡したことが窺える。また、三戸主余

の町数は本券に明示していることも添えられている。

このように家宅地（屋地）私領は九世紀から十四世紀に至るまで〈戸主〉を町数の別称として用いられていたと考えられる。同時に田畠私領に〈戸主〉を使つて町数の別称としていたと考えられる。つまり、清水三男氏が指摘したように〈一戸主〉が一規模の広さを想定するならば、家宅地あるいは田畠地を問わず、一戸主は二町となろう。だが、この広さⅡ地積を単位とした時期には、町・段・歩を家宅地および田畠地の広さと認識して用いられていたことがわかり、次にその例証として五例挙げることにしたい。

まず、家宅地にかかわる史料をみると、永延二（九八八）年四月十九日付の「大法師慶泉家地買券」の「売買家地立券文事」〔合三百歩 大和国添上郡京南五条五里一坪之内〕という文言、永承五（一〇五〇）年三月十五日付の「僧道誓家売券」の「沽却 家地券文事」〔合二段〕「在左京七条四方十二坪」という文言があり、家宅地の広さを示す単位に段歩を用いていることがわかる。だが、段歩で家宅地の広さを表現する以外に「一所（二処）」と明示することもある（長寛元年五月二日付の「藤井国方家地売券」〔平安遺文七—三二五五〕）。

次に田畠地関連の史料を掲げると、天喜四（一〇五六）年三月十日付の「白日正覚田地売券」の「申沽進常地田事」〔合七段 在三田郷内見方埼村字治口〕という文言、⁽²⁶⁾ 応徳三（一〇八六）年十二月二十日付の「僧良暹田地売券案」の「売渡進田事」〔合一段百歩〕「右田、良暹先所相伝領也、（中略）、作桓尻之畠入道所売進渡如件」という記載、そして仁平三（一一五三）年三月日付の「僧定賢田地売券」の「沽却 田畠事」〔合一段〕という文言がみえ、⁽²⁸⁾ 田畠地の広さの単位表現に段歩が使われている。

このように家宅地や田畠地などの広さの単位には、戸主や段歩が同時期に用いられていたことはたしかなことであるが、広さつまり地積を示す戸主と段歩が同時期に使用された意図については明らかにしたい。

ところで、広さの単位としての〈戸主〉の呼称以外に、この論及の主な視点である初期荘園の愛智荘に現われる

戸主のような人たちの存在は、初期荘園の労働力再編にもなって消え去ったのであろうか。また、荘園形成期に出現する田堵・名主と戸主・戸との接点は荘園や国・公領に存在しなかったのであらうか。

そこで、次に荘園や国・公領での〈戸主〉〈戸（戸口）〉の存否と、〈戸主〉〈戸（戸口）〉と田堵・名主とのかわりの有無について考えていくことにしたい。

註

- (1) 清水三男「宅地の『戸主』について」（『上代の土地関係』所収）
- (2) 『平安遺文』第一巻、第二〇七号文書（以下同様にて、平安遺文一一二〇七というように略す）
- (3) 平安遺文六―三〇二〇
- (4) 平安遺文一―二五六
- (5) 平安遺文六―三〇二〇
- (6) 清水、前掲書
- (7) 『鎌倉遺文』第三三巻、第二五〇五九号文書（以下同様にて、鎌倉遺文三三―二五〇五九というように略す）
清水氏前掲書に同史料を提示している。
- (8) 平安遺文七―三六二四
- (9) 平安遺文六―三〇二〇
- (10) 平安遺文七―三七六七
- (11) 平安遺文八―四二七〇
- (12) 平安遺文一―七〇
- (13) 平安遺文一―八六
- (14) 平安遺文一―九二
- (15) 平安遺文一―五四
この史料に明示されている戸口中嶋連大刀自古は、同条里周辺の墾田三段を承和三（八三六）年に買得している人物と同一であろう（平安遺文一―六〇）。
- (16) 平安遺文一―一一七
- (17) 平安遺文一―二〇〇
- (18) 平安遺文一―二四三
- (19) 平安遺文五―二〇五五
- (20) 鎌倉遺文四―二二六九
- (21) 鎌倉遺文一四―一一一七
- (22) 鎌倉遺文一九―一四一四八
- (23) 鎌倉遺文二八―二一五四七
- (24) 平安遺文二―三三一
- (25) 平安遺文三―六七九
- (26) 平安遺文三―七六九
- (27) 平安遺文四―一二五二
- (28) 平安遺文六―二七八二

この史料に記載されている田畠地売買とは違って、畠地売買の史料もみえる。その史料を二例挙げると、天承

二(一一三二) 年二月十一日付の「僧某畠券」の「売渡
畠新券文事」「合二段者此中一段国貞譲与了」という文言
(平安遺文五―二二七)、康治二(一一四三) 年二月

二十二日付の「川住四子畠地売券」の「沽却 相伝畠
事」「合一処者川上御荘内」という文言(平安遺文六―二
五〇二) がそれらである。

第二章 一二世紀前後の寺領荘園における戸主・戸の存在形態

寺領荘園の形成(成立)期の〈初期荘園〉についての先学諸氏の論究は周知されているが、初期荘園の消滅説から一転して荘園経営での労働力の編成・再編成にともなう荘園経営の機能変化がもたらされたと考えられる労働力編成説^②が有力になって久しい。

ただ、初期荘園の経営基盤である労働力主体の変化と律令制で公民であった戸主や戸(戸口)の関与の有無などに視点を当てられることはなかった。

ただ、荘園所在周辺地域の農民・浮浪人・逃亡班田農民などの労働力主体が初期荘園の編成を支えたとする丸山幸彦説^③をはじめ、古くは班田農民・旧墾田主による質祖・請作形態としての労働主体が初期荘園経営の基盤であるとする小野武夫説^④や新しくは初期荘園経営での請負主体の郡司層・郷村長層・有力農民層から労働力主体を提示した藤井一二説^⑤などが、初期荘園における経営体と労働力主体にかかわる論稿であるといえよう。

とりわけ、丸山氏の労働力主体に視点を当てて初期荘園の編成基因を捉えた論究に影響を受けて、同氏の視野になかった〈戸主〉〈戸(戸口)〉の関与はどうであったのか、また労働力主体としての〈戸主〉〈戸(戸口)〉の存在はあり得たのか、否かに関心事をよせて、初期荘園の編成・再編成について別稿^⑥で言及したつもりである。また、同様な視点で元興寺領荘園(とくに初期荘園の章)についての論稿も公^⑦にしてきた。

いずれの論稿においても、戸主や戸の存在に注視してきたつもりであったが、初期荘園以後の荘園経営にかかわってきたものか、否かについての検討は後の機会にできた。ただ、さきの論稿で提示した承徳三（一〇九九）年八月二十八日付の「左衛門少志中原資清勘文案」の「一通、多気飯野両郡司下田堵戸主符」という文言と長承二（一一三三）年五月付の「伊勢国大國莊田堵住人等解」の「戸与莊各数百歳之間、無相論令領掌来也」「被停止件戸主等非道之妨者」という記載は、一二世紀に至るまで（否、一三世紀または一四世紀に至るかもしれないと想定している）戸主・戸の存在を示唆していると考えていたからである。

そこで、ここでは寺領荘園と神領荘園にかかわる戸主・戸の存否について検討していくことにしたいが、さきに元興寺領荘園の論稿で提示した初期荘園関係史料として掲げた貞觀元（八五九）年十二月二十五日付の「近江国依智莊檢田帳」をみると、九条九里三十五（坪）下の古家田五段二〇〇步に関して、

右坪、田刀・依知・大富・愁云、此田唯有名少実、尤由進地子、（中略）、前々寺所預三段二百步、被奪公田二段也、披陳其由、口分戸主依知真象申云、己不知寺田給口分、今承賢者教、更不預作申、避己畢、即進地子、

（中略）

八里二十八門田六段二百四十步下

右坪、南一段十六步 依知秦公益繼称、己治田沾進日向守藤原顯基朝臣宅、（下略）

という記載^⑩があり（傍点・傍線―奥野、以下同様にて略す）、九条九里三十五下の古家田五段二百步は預（預作か）三段二〇〇步と収奪された公田二段のことであり、この田地について田刀・田堵の依知大富が愁いて申し述べた披陳に対して戸主依知真象が申し告げたことを示している。また、一条八里二八（坪）門田六段二四〇步の内一段一六步は依知秦公益繼（戸主）の治田であったが、日向守藤原顯基に注進したことが明示されている。

それぞれの条里坪の田地にかかわる百姓に「戸主依知真象」「田刀依知大富」「依知秦公益繼」の名がみえる。と

りわけ、依知秦公益継はすでに掲げた仁寿四（八五四）年十二月十一日付の「近江国大國郷墾田売券」に「十一
八里三十門田一段戸主依知秦公益継戸同平刀自安土」という文言から「戸主」であったことが窺える。

このような事象を加味すると、初期荘園時期の愛智荘にも「田堵」と「戸主」「戸口」が混然と存在してい
たことがわかるとともに、田堵と戸主・戸との間で反目していた状況にあったことも窺える。

このような状態を表現していたのが、さきに示した承徳三（一〇九九）年の「左衛門少志中原資清勘文案」の
「多氣飯野両郡司下田堵戸主符」という文言であると考えたい。

このことはともかく、一二世紀前後の寺領の領有地をめぐるって寺院が争論する田地に戸主が存在し、戸主の領
有する田地が公田であることを示してくれる史料を次に掲げて、公田耕作者である戸主の存在をみることにしよう。
すなわち、康和元（一〇九九）年九月十九日付の「左衛門少志中原資清勘文」には、「勘申東寺与成願寺相論田地
十七町六段二百十歩事」にかかわる事柄による両寺の言い分として、

爰成願寺論田十七町四段二百十歩、在多氣郡十六条二井内里十三坪上国帖一町・三足田里四坪下国帳一町・

（中略）、已上十三町者、不載去弘仁三年十二月九日贈（中略）親王領大國莊施入東寺之状、（中略）、但去延
暦二十二年正月七日勅施入川合田六十六町内、成願寺論田十三町皆以所注載也、其殘四町四段二百十歩、在同
十六条須具田一町・（中略）、飯野郡十八条五井上里一坪神道田二段、已上四町四段二百十歩者東寺所進去承和
十二年四月十五日多氣飯野両郡司所勘進之絵図内皆注東寺領、（中略）、去承和□円田一処、以莊外勅施入東寺
□二箇坪・田、令相博莊内公田之後、（中略）、件莊外施入東寺田、各戸主等進□所不相博也、（中略）、□延喜
年中三郡令班田之日、神社仏寺□田等坪も各被定置之後、至于今日更□相論之處、今俄被如此非理妨之条、□
何故乎、若枉理有相博之更改者、如□公田各戸主等可進領掌欵、（中略）、然則今成願寺領田十三町者、当初雖
為東寺之勅旨田、相博大國莊内公田之以後、不為東寺領之由、（中略）、於論田十七町余町、依東寺所進承和二

年（中略）相博省符并延長三年 太神宮牒東寺之状、兼又成願寺所進（中略）民部省図帳案、成願寺伝領頗似有其謂、仍勘申、

という記載があり、伊勢国多気郡と飯野郡にある領有地をめぐって東寺と成願寺とが係争を引き起こして、係争の勝敗には寺領と公田の相博の有無（存否）がからみあっていた。その焦点となっていた大國荘内の公田は戸主領有の田地であつたことが窺え、一一世紀末に俄に相論が生じることに対する問題点がみられる。

だが、康和元（一〇九九）年十月十一日付の「左衛門少志中原資清重勘文」には、「至於相博干公田之代田者、注入東寺莊田相博之由」「以本勅旨田二十一町余、相替大國荘内公田二十余町、於東寺領之意也」「方今成願寺相論坪坪十五町同在三十八町三段二百歩内、因茲公田代勅旨田依有年来領掌之実、成願寺可伝領欵」という記載があるが、「公田」云々の文言には戸主がかかわっているものか、否かは明示されていない。ただ、記載内容は東寺領と成願寺領にかかわる相論であるが、すでに掲げた相論に加えて、大國荘公田の相替の状況とともに、川合荘の莊田にかかわる「戸主」の存在が明示されている。同重勘文にみえる東寺領大國荘と川合荘の莊司解状に表示された「大國荘内公田代以川合莊田二十一町二段百四十歩、雖宛置於戸主等」という文言がそれである。¹⁵

この大國荘内の公田と関係すると思われる戸主については、ずっと時期が下がるが、長承二（一一三三）年五月付の「伊勢國田堵住人等解」をみると

大國御莊田堵住人等解 申請 本家 裁事

（中 略）

在管飯野郡十一條六井於里坪々

同里田号二坪田二反百二十歩、御正作田也、而種蒔耕作後井手郷兄國子屎戸破取、

同里以十五坪今改十一坪桑畠六反三百四十歩□中之

一反三百四十歩、同戸破取、

一反兄国郷□□小藤子戸破取

(中 略)

同里以二十三坪改十三坪田二反百四十歩、兄国郷石部貞吉戸破取

同里以二十二坪改十四坪田□反八十歩、畠一反、兄国郷秦菅町戸破取、

同里以二十八坪田六十歩、神戸里秦石部丸戸破取、

(中 略)

右、謹承旧記、件御莊者、布施内親王御領也、(中略)、自延喜以後二百三十一年也、是以自延喜班田之時以来、戸与莊各数百歳之間、無相論所領掌来也、而今彼戸主等背棄旧領図合坪坪巧横惑、(中略)、被停止戸主等非道之妨者、以将仰本寺御威之嚴矣、(下略)

という記載があり、一二世紀前半の大国荘内には兄国子屎戸・小藤戸・石部貞吉・秦菅町戸などの〈戸〉が存在し、田堵住人ら一伴得久・長久枝・藤原枝成・佐伯友久・大神真枝・藤原行正―と共存していたことがわかる。荘内の共存は延喜年間の班田以来、〈戸主・戸〔戸口〕包括か〉と〈荘(荘田耕作者田堵らを包括か)〉の間で相論もなく各々領掌することで成りたっていたが、いまに及んで〈戸主〉らは旧領図合の坪々を巧みに横惑して背棄し、坪々の田地を破取ったことが明示されている。また、神封戸田については官省符の主旨に背いて破取ったことも窺える。

このような大国荘内での〈戸〉の横妨の事態は同年四月十六日付と七月十日付の「内膳正資清書状」にみえる。次に十六日付と十日付の資清書状を掲げることになしよう。

俄為戸も給主等、背三百余个年莊領掌之理、経訴^於祭主、莊領田畠二町二反余歩之中、田一町三反六十歩之内、

於一町三百步者、戸方破取、或爲戸主押作己了、或爲戸預、所當官物令徵納又了、(中略)、但以去年戸方仁ハ莊田破取文、成祭主判下給之由云々、(下略)——十六日付記載

今一度仰遣祭主之許候、但石丸戸と申戸元並か戸と申ハ祭主領戸也、仍石丸戸田仁莊田領能田四反破取、元並戸同田二反百步破取、閑丸戸と申ハ祭主甥神祇權少副領戸也、件戸仁莊田四反百破取、如此間、自余人も戸強所沙汰候也、(中略)、於莊田等者、如先破定戸方令播殖了、莊方御正作田四反許そ令播殖候□之、且莊本領田畠を不可妨之由、且彼殖田等秋時仁莊方仁可令刈取之由、御沙汰可候也、(下略)——十日付記載

兩日付の記載¹⁸⁾から、莊領の一町三〇〇歩を戸方が破取る戸ともに、戸主が押作したことおよび戸の預りとして所當官物を徵納せしめたことがわかる(十六日付)。また、石丸戸と元並戸と称する戸は(祭主領戸)であり、閑丸戸は(神祇權少副領戸(祭主甥))であることが窺える。そして、各戸が莊領を破取るが、莊本領田畠への押妨をなすべきでないことと、殖田などは秋季に莊方が刈り取ることを沙汰すべきであると明示している(十日付)。

これらの事象とともに、康和元(一〇九九)年の清重勘文や長承二(一一三三)年の田堵住人等解文とあわせて考えられることは、伊勢国大國莊には田堵とともに、戸主と戸(戸方)が並存していたことと、戸の中には祭主領と神祇權少副領の(戸)があつたことを提示し得る。そして、莊内の田堵住人が難渋するほど戸主・戸の押妨・非道は、一一三〇年代前半に起こつた事態であることが示されている。

大國莊内の戸主や戸は、律令社会崩壊後も存続していたことがわかる。大國莊における戸主や戸らが莊田を耕作する様子は長承三(一一三四)年十一月二十九日付の「伊勢国大國莊專当解」にもみえ、戸主・戸らの莊域での状況が窺える。すなわち、

付・去・年・下・作・田・堵・令・催・弁・済、以・去・年・四・月・十・一・日、爲・閑・丸・元・並・福・並・菅・町・戸・給・主・等・背・旧・領・理、称・有・御・外・題、當・莊・領・田・一・町・二・段、是・非・不・論・破・取、各・押・作・苅・取、不・弁・済・御・年・貢・子・細・狀、

という記載⁽¹⁹⁾に続いて、「件・莊・田・為・莊・領、雖・經・數・百・年、以・去・四・月、俄・背・御・莊・旧・領・之・理、為・彼・戸・給・主・等・破・取、各・令・耕・作・先・畢、（中略）、号・播・殖・田、從・戸・方・苅・取・又・了、（中略）、去・年・作・人・等・申・云、於・所・当・官・物・者、戸・主・方・弁・濟・之・由・申、（中略）、祭・主・裁、任・御・莊・得・理・裁・定・之・旨、以・去・年・号・戸・田、令・押・播・殖・莊・領・田・一・町・二・段、去・年・所・当・御・年・貢・可・令・弁・濟・之・由」とあり、大國莊旧領の道理に違背して、播殖を妨し、戸方の播殖田であると称して苅取りをおこなうが、所当官物の弁済を履行する戸方と所当官物の弁済を意図する戸主方などの様子は、さきの勘文および重勘文にみた状況と同様である。この状況に加えて、関心事は戸方が耕作・播殖して、苅取る莊領田を〈戸田〉と号したことであり、戸田から考えられる田地は〈封戸〉にかかわる公領田である。また、もう一つの関心事は戸方と称する閑丸戸・元並戸・福並戸であり、元並戸は祭主領の戸である。このことは、さきに掲げた資清重勘文から判断できる。ただ、福並戸と菅町戸が伊勢神宮にかかわる祭主領に属するか、権少副領に属するか、他所属の戸であるのかは明確ではない。

いずれにしても一一世紀後半から一二世紀前半にかけての大國莊域には、莊田耕作者として田堵と戸主・戸がいたことは確かであるといえよう。そして、すでに挙げた康和元（一〇九九）年の「中原資清重勘文」にみる「以本勅旨田二十一町余、相替大國莊内公田二十余町」⁽²⁰⁾「大國莊内公田代所替放之勅旨田十五町者、須為公田也」⁽²¹⁾「大國莊本券称不載相論田十七箇坪、以其替公田」という文言は東寺と成願寺の言い分であるが、これらの文言には大國莊内の公田などが明示されている。この公田と戸主との繋りは、同重勘文の約一ヶ月ほど遡る九月十九日付の「左衛門少志中原資清勘文」にみえる「有相博之更改者、如□公田各戸主等可進退領掌欵」⁽²²⁾「当初雖為東寺之勅旨田、相博大國莊内公田之以後、不為東寺領之由」という文言とあわせると、戸主や戸は公田とかかわっていたと考えられる。

しかし、大國莊あるいは東寺領・成願寺領にかかわる二・三の史料から、ほとんど抽出できなかった戸主や戸と

関係する戸田（封戸）については明確に提示できなかった。そして、現段階では、荘域内戸主・戸―耕作↓戸田⇌封戸（御封）⇌公田（公領）という図式を想定すべき要件を満たしていないことは確かなことである。

さらに、荘園―公田―戸主・戸の繋がりを示す事象は大国荘のみの状況を表現するものか、否かも明確でない。つまり、大国荘でみられる戸主や戸の存在形態は、ほかの寺領荘園には皆無な事態であると理解すべきものかも明らかにしたい。このことについては、次にあらためていくつかの史料を繙きながら検討していくことにしたい。

註

(1) 藤間生大『日本荘園史』（主に「荘園の本質」「荘園の崩壊」などの論稿）

竹内理三『竹内理三著作集・第七巻 荘園史研究』

（主に「初期荘園の形成」「初期荘園の分布型態」「転形期の荘園―治田の形成」などの論稿）

岸俊男『越前国東大寺領荘園の経営』（『日本古代政治史研究』所収）

小野武夫『成立期荘園の形成』（『日本荘園制史論』所収）

弥永貞三「聚落と耕地其の一」「聚落と耕地其の二」

（『奈良時代の貴族と農民』所収）

吉村武彦「初期荘園にみる労働力編成について」（『原始古代社会研究Ⅰ』所収）

丸山幸彦「初期荘園の形成（上）（下）」（『日本史研究』第一六五号・一六六号所収）

藤井一二「初期荘園の成立と形成」（『初期荘園史の研究』

究』所収）

これらの論稿以外にも荘園制形成にかかわる多数の論稿があるが、ここでは割愛することにした。ただ、二・三の論著を次に挙げておきたい。

西岡虎之助『荘園史の研究 上巻』、阿倍猛『日本荘園成立史の研究』、奥野中彦『日本における荘園制形成過程の研究』などの論著がある。

(2) 丸山、前掲書

藤井、前掲書

(3) 丸山、前掲書

(4) 小野、前掲書

(5) 藤井、前掲書

(6) 奥野義雄「初期荘園をめぐる変革と展開——とくに労働主体の変移からみた初期荘園の経営構造の再編成を中心に——」（『鷹陵史学』第三一号〈佛教大学鷹陵史学会刊〉所収）

(7) 奥野義雄「古代・中世における元興寺領荘園の実態を

めぐって——初期荘園の愛智荘を中心に、元興寺諸荘園の存否によせて——」（『元興寺文化財研究所四〇周年記念論集』△元興寺文化財研究所刊）所収）

(8) 『平安遺文』第四卷、第一四〇七号文書（以下同様にて、平安遺文四——一四〇七というように略す）

(9) 平安遺文五——二二七二

(10) 平安遺文一——二二八

(11) 平安遺文一——一七

(12) 平安遺文四——一四〇七

(13) 平安遺文四——一四一〇

この史料に明示している荘外の施入田については、延長四（九二六）年二月十三日付の「伊勢太神宮司牒案」にも「牒、件荘外施入東寺田、是各戸主等進妨、所不相

博也」とある（平安遺文一——二二二）。

(14) 東寺領と成願寺領の領有地にかかわる係争での領知権については、すでに竹内理三氏は「変質期以前の東寺領」（『竹内理三著作集・第三卷 寺領荘園の研究』所収）で論及している。ただ、竹内氏は論究において、田堵および戸主・戸あるいは封戸などは触れられていない。

(15) 平安遺文四——一四一七

(16) 平安遺文五——二二七二

(17) 平安遺文五——二二七三・二二七四

(18) 平安遺文五——一三〇七

(19) 平安遺文四——一四一七

(20) 平安遺文四——一四一〇

第三章 一四世紀の寺領に現われる戸主と戸の存在形態

——伊勢国法常住院領と封戸田を中心に——

一二世紀前後に寺領荘園にみられた戸主や戸は、史料には現われないが、恐らく一二世紀後半から一三世紀に至るまで存在し続けたと想定している。

この想定と直接に繋がるものではないが、〈戸〉の存在を示唆する史料に嘉元四（一三〇六）年十二月二十五日付の「祭主^{大中臣}御教書」「法常住院別当権師審円申、当寺領多氣郡麻積郷敢礖部常吉一烟、作人三郎案主・四郎長兄弟父子以下、抑留四年所当由事」という記載があり（傍点・傍線―奥野、以下同様にて略す）、「礖部常吉一烟」

という文言の一烟とは、ずっと時期が遡るが、康保元（九六四）年十二月十三日付の「醍醐寺牒」にみえる

三、烟・在宇治郡山科郷

戸主、宇治峯真戸、

（中略）

戸主、国背好男戸、

（中略）

戸主、大宅豊宗戸、

四条大敷里十三一三反西一 十八一六反北一 二十九一二百六十步南一 （下略）

という記載と、延喜二十二（九二二）年四月五日付の「和泉国大鳥神社流記帳」の「御封四烟」「当国二烟」「阿波国二烟」という文言によって、法常住院領に存在する礒部常吉戸はその一構成員として戸主の戸であったことになろう。なぜなら、醍醐寺のように三烟という場合は三つの戸主の戸を表現したものであることを示している。

このように理解すると、法常住院領での一烟とは〈戸主礒部常吉戸〉の一つを示すものかもしれないが、断定し得る例証はない。ただ、さきの大鳥神社流記帳にみえる四烟は〈御封（封戸）〉であることがわかる。

この法常住院領における戸主・戸および封戸（戸田）については、次に詳しく史料を繙きながら検討していくことにしたい。

まず、徳治二（一一三〇七）年正月二十三日付の「神麻積貞清陳状」に「麻積郷常吉田畠之給主貞清等、年来進退耕作」という文言があり、法常住院領の礒部常吉戸田畠の給主に貞清（重行・弘重）らがいたことになろう。また、この文言に加えて同陳状の貞清らの弁申には「凡於有限年貢者、欲令弁済、麻積郷常吉戸田畠、不顧以前沙汰次第」という記載があり、常吉戸の田畠には〈戸田〉が読み取れる。さらに、徳治二年の史料と理解されている「敢

石部恒吉授田注文^⑦」の

戸主・麻積吉永・戸主・今住・敢石部恒吉・戸

授田四町三百歩

四条一速田三十四坪三段 二田村里一坪 五坪二段 十七坪一段

(中 略)

比郡四段百二十四歩

という記載^⑥から、戸主の麻積吉永の戸である石部恒吉戸が授かった田地は四町三〇〇歩であったことがわかる。

そして、同じく徳治二年の史料と認識されている「常吉成正戸田注文」には、恒吉戸・常吉戸・成生戸の名が明示されている。すなわち、

給田

(恒)

二反遠高^中

一・反垣吉戸・作人成沢
一・反成生戸・作人京沢

一反康信常吉戸・作人安垣^(恒)

一反康経常吉戸・作人成常 一反長盛成生^(戸丸)房作人字宮掌

已上二町五反

という記載^⑦があり、五反の給田に恒吉戸・成生戸・常吉戸の各戸に作人がいたこともわかるとともに(御正作に二町があり、合せて二町五反となる)、戸主麻積吉永戸恒吉以外に戸主名不明の常吉戸と成生戸の存在が窺えるが、二つの戸は戸主吉永戸常吉・同戸成生とても想定できるかもしれない。ただ、徳治二年の史料と容認されている「法常住院寺領目録文書」の「常吉戸一畑」という文言^⑧によって、「一畑(二畑)」をさきに触れ康保元年の「畑」が戸主の戸を表現したものと解釈すると常吉戸と考えられなくはない。そして、この寺領目録文書をみると、「一枚柏木欵証文二段 有爾孝町戸也」「一通成宗戸四段証文」という文言^⑨があり、常吉戸以外に(戸主不明の)有爾孝

町戸と成宗戸が存在していたことになろう。

さらに、常吉戸などの戸々に田地の直接耕作人がいたことも窺えるが、「職」付帯の耕作人が存在したことも徳治二（一三〇七）年十二月二十三日付の「貞清重行作手職請文案」によつて窺える。すなわち、

法常住院御領常吉戸田百姓貞清・重行請文事

右、件戸田者、無諸方違乱、恒吉段別五百文用途、無毎年懈怠、慥可弁済、若有限所当并三分□公事等対捍之時者、可被替作手職者也、此内常吉畠地者、^{（速力）}□急^{（其力）}□可致□沙汰、（中略）、於桑代者、段別五升米可納^{（入力）}□也、

（下略）

という記載がそれであり、法常住院領の常吉戸の戸田を貞清と重行の二人の百姓が耕作して懈怠なく所当公事の弁納を果たすことによつて作手職付帯は約束されていたことが窺える。ただ、戸田の地積は明らかではない。また、恒吉（石部恒吉か）の段別五〇〇文の用途と常吉戸の戸田とのかかわりについても明確にしたい。

だが、作手職付帯者の百姓貞清と重行は、さきに掲げた徳治二年の「神麻積貞清等陳状」にみえる「神麻積貞清・重行・弘重謹弁事」という文言の神麻積貞清と重行の両名であり、常吉戸の戸田の給主であつたことがわかる。百姓貞清と重行は戸田の耕作人の地位を作手職付帯によつて保証されていたと考えられる他方、すでに示した石部恒吉戸の戸主麻積吉永の戸に永真や石王次郎らの住居があつたこと以外に、〈本名〉吉永戸百姓という表現によつて〈戸〉と〈名〉との繋がりを徳治三（一三〇八）年三月十一日付の「祭主^大御教書写」から窺える。すなわち、

法常住院別当権律師審円申、為佐田蔵人公益并河内房以下輩、違背庁宣、以今月七日打入^{如状者}当寺領本名吉永戸百姓永真・石王次郎等住宅、追捕損亡申事、散状案。申状具書等、披露候処、○彼等所行絶常篇也、（下略）とあり、佐田蔵人や河内房らによる本名吉永戸の百姓家宅へ押し入る違乱について記載されている。この記載に示

されている「本名」とは名」または名主」を意図した用語と考えられる。つまり、本名」または本名主」の吉永戸ということになる。

また、徳治三（一三〇八）年三月付の「度会神主基光散状写」の「法常住院別当権律師審円申、為多気郡司入道 簀河内房并佐田藏人公益已下輩等、責当寺領戸田百姓宮王大夫永真等、令打擲初王丸、狼藉無比類由事」という記載¹³にみえる河内房は多気郡々司簀であることがわかり、郡司簀の河内房らが狼藉を働いたとも読み取れるが、郡司が簀の河内房を表面に立たせて狼藉を指示していたとも解釈できる。

そして、徳治二年の作手職請文案と徳治三年の基光状写に明示されている戸田」は封戸田のことを表現したものであり、もともとは律令国家での上級貴族に与えられた俸禄であるといわれているものである。

この戸田については封戸と戸とのかかりで後述することにした。ここでは、伊勢国法常住院領の戸の存在に視点を戻すことにしよう。

すでに掲げた二・三の史料から法常住院領の全貌を知ることができないが、少し時期が下がる元亨三（一三二三）年二月銘の史料と容認されている「伊勢法常住院領田畠支配目録」をみると、

／常吉戸一畑田畠四町余^{（概）}

／一通鎌田証文二町

／一通河後一町証文

／一通同所三段

／同所一町三段起信状^{（通）}

／一通柴田一町証文

／一通同所二段証文

一通同所又二段証文

／三通賀茂磯部二段証文

（中略）

／数枚柳原証文無正文

一段半当作二丈余

莊園公領における戸主・戸をめぐる存在形態

／一枚柏木欵証文二段

有爾孝町戸也

／一卷大谷証文

／一通麻統畠地証文

／一通成宗戸四段証文

二保証文不出

という町段数が明示¹⁴されている。町段数を示す件数のみを合算すると九町九段半となるが、町段数を記載していない七件に町段数があるならば、法常住院領は一〇町を越える田畠を支配・保有していたことになる。

また、この田畠文書目録によるかぎり、院領として常吉戸一畑(畑)・有爾孝町戸・成宗の三つの〈戸〉は一二〇年代に存在していたことになる。その内、二つの戸は四町と四段ほどの地積を保持していたが、有爾孝町戸は町段数の明示はない。当然ながら、保持する地積はあったと考えられよう。

このように法常住院領には、三つの戸以外に、さきに掲げた徳治三年の御教書写や基光散状写でみた吉永戸(本名)が存在していたことになり、吉永戸の戸田に直接耕作人(百姓宮王大夫永真ら)がいたように、常吉戸・有爾孝町戸・成宗戸の戸田にも直接耕作人が存在していたと考えられなくはない。

法常住院領は、すでに前述した東寺と成願寺との間で係争していた大國莊・川合莊にみる〈戸主〉〈戸〉と〈戸田〉と同様であり、莊域に封戸田が存在していたことになろう。なぜなら、さきに掲げた長承三年の「伊勢国大國莊專当解」にみえる「以去年号戸田、令押播殖莊領田一町二段、去年所当御年貢可令弁済之由」という文言と、文永七(一二七〇)年十一月二十六日付の「大中臣^{陰隆}田地去文」の「永避渡今虫戸授給内宇治郷所在下田稲月田地一段事」「右、件戸田者、外祖父故昇運財内也」という文言¹⁵によって、〈戸〉の耕作対象の領有地(授給田)は戸田であったことが理解でき、〈戸主〉〈戸〉―授給―〈戸田〉＝封戸田という図式が想定し得るゆえに、東寺領・成願寺領の〈戸主〉〈戸〉および法常住院領の〈戸〉の領有地は戸田(封戸田)と考えるべきであろう。

では、戸田つまり封戸田は、律令国家崩壊後にすべてが莊園化したのであろうか。それとも公領とは違って、戸

田Ⅱ封戸田は荘園制下で荘園とは区別された領有地として認識されていたのであろうか。このことについてはもう少し検討していくことにしたい。なぜなら、封戸田が律令国家崩壊後も脈々と存続していることは、戸田の保有者として戸主または戸が存在していたことを暗示してくれるのでないかと考えている。

そこで、まず次に時期的にはずつと遡る封戸にかかわる史料を二例を掲げることには、一例目の天曆四（九五〇）年十一月二十日付の「東大寺封戸荘園并寺用帳」には、

伊賀国百戸、

調糸百九十一絢七十絢七両二分阿拜郡六十戸料
百二十絢七両二分伊賀郡四十戸料

（中略）

近江国百五十戸、

調絹百四十二疋五丈二尺五寸（割中略

「愛智郡百戸料」「坂田郡五十戸料」の文言あり）

（中略）

美濃国百戸、

調絹二十八疋二丈二尺五寸（割註略

「大野郡五十戸料」「県郡五十戸料」の文言あり）

駿河国百戸、

（中略

「益頭郡五十戸料」「富士郡五十戸料」の文言あり）

下野国二百五十戸、

調庸料調布千百十端一丈九尺（割註略）

二百二十二端二丈四尺足利郡五十戸料、（中略）、梁田郡五十戸料、（中略）、都賀郡五十戸料、（中略）、芳

賀郡五十戸料、（中略）、塩屋郡五十戸料、

荘園公領における戸主・戸をめぐる存在形態

・若・狭・国・五・十・戸
(中 略)

・越・中・国・百・五・十・戸
(中 略)

(中 略 「越後国二百戸」以下八ヶ国の戸の記載あり)

大和国田地九十五町四段三百五十二歩

添上郡酒登荘六町五段六十五歩 (割註略)

(中 略 「同郡樺本荘」「山辺郡長屋荘」など、大和国各荘園の田数の記載有り)

山背国相楽郡畠八町

泉荘四町

甕原荘四町 六段造寺所

(中 略)

近江国水田二百五十町二百十二歩

神埼郡因幡荘百二十一町二十六歩 愛智郡大国荘田七町一段三百二十歩 犬上郡霸流荘田百十二町七段三十

六歩 (下 略)

という記載があり、当然のことながら封戸と荘園は区別されていた。九五〇年代に東大寺領荘園とともに封戸が存在することと、東大寺封戸は一五ヶ国に及んでいることがわかる。

一〇世紀中頃の東大寺封戸は一三世紀後半の弘安八(一二八五)年八月付の「東大寺注進状案」をみると、

注進

本朝惣国分寺兼和州国分寺東大寺御封井水田事

右、為公家御沙汰内、伊賀国、

伊賀国

一 御封百戸内、阿拝郡六十戸、伊賀郡四十戸、

(中略)

右、当国御封、如形雖有所済之号、僅不及一口半、雅經卿国務之時、就便宜、切課当国寺領黒田莊・内保莊・(中略)・玉瀧莊・榎山莊等了、其足干今所令運済也、(下略)

という記載⁽¹⁸⁾があり、東大寺領黒田莊・内保莊・湯船莊・玉瀧莊・榎山莊などの莊園とともに「御封百戸」の存続を窺うことができる。

弘安八年の東大寺注進状案には、伊賀国の御封(封戸)のみでなく、武蔵国「御封五十戸」⁽¹⁹⁾、上総国「御封百五十戸」⁽²⁰⁾、近江国「御封百五十戸内 愛智郡大国・藪郷百戸 坂田郡上坂郷」⁽²¹⁾、美濃国「御封百戸 大野郡伊備郷五十戸方懸五十戸」⁽²²⁾などを含めて二一ヶ国に御封⁽²³⁾封戸があり、同注進状案によるかぎり、「兼和州国分寺東大寺御封等事」という文言と、「兼和州国分寺東大寺御封水田等事」という文言⁽²⁴⁾があるが、御封と莊園を併記している諸国には「御封水田」の用語が使用されている。このことはともかく、東大寺御封は一〇世紀中頃と一三世紀後半とでは差異がみられる。一〇世紀中頃の東大寺御封の内、阿波国百戸と駿河国百戸は、一三世紀後半の東大寺御封のある諸国には記載されていない。また、逆に一三世紀後半の東大寺御封にはその国名・戸数の記載はあるが、一〇世紀中頃の東大寺御封の諸国名・戸数にはみあたらない。一〇世紀中頃でない諸国名・戸数は六ヶ国で、武蔵国(五〇戸)、上総国(一五〇戸)、上野国(三五〇戸)、佐渡国(二〇〇戸)、丹波国(二五〇戸)、美作国(一〇〇戸)であったことになる。

このように御封Ⅱ封戸（戸田）が荘園と区別されて一四世紀に至るまで存在し続けることは、その領有地内に戸主や戸（戸口）が存続していたと考えられなくてはならない。それゆえに、すでに言及した長承二（一一三三）年の「伊勢国大國莊田堵住人等解」²⁵にみえる戸主や戸による横妨に対する大國莊田堵住人の不安と愁いの事態が表面化したものと考えられる。

そして、莊内田堵住人と戸主・戸との係争を示す地域が伊勢国のみという疑義を持たない訳ではないが、正和二（一一三三）年九月十□□付の「鎮西下知状案」にみる「宇佐宮供僧神堯申豊前國封戸郷田二段三十号蛤原」²⁶「右、件田地者、往古神領、神堯相伝之地也」という文言は、宇佐宮供僧の神堯相伝の田地で、往古神領であり、豊前國封戸郷の郷田であつたことを明示している。この案文には、封戸郷田であること以外に、戸主や戸とかかわる田地であつたかは明確にしがたいが、この時期に封戸郷の存在が窺える。

この案文と同様な史料をもう一例掲げることにした。ただ、ずっと遡った時期になるが、応保二（一一六二）年八月付の「東大寺牒」にみる「東大寺牒 甲斐國衙」「欲早被任旧弁済寺家封戸五十畑調庸雜物代事」「件封戸三期有限、寺用又定矣、面貴國追年無弁済之勤」という記載がそれであり、甲斐國に東大寺封戸（御封）が五十畑（五十戸主・戸）あつたことに加えて、甲斐國より調庸雜物代などの弁済の勤仕がないことを示している。

したがって、律令國家社會以後、一〇世紀を経て、一二世紀を過ぎて一四世紀に至るまで、莊園所領とは別に領有する御封Ⅱ封戸が存続する状況下では、封戸田に従事してきた〈戸主〉〈戸〉が存続しなかつたとは考えがたい。〈戸主〉〈戸〉が存続したゆえに莊園に従事してきた〈田堵〉らとの係争が生じてきたといえよう。そして、想定するならば、戸主や戸らが〈本名〉と称する（称される）事象も現われて、百姓名体制に組み込まれて〈戸主〉〈戸〉の呼称が消え去っていくことも考えるべきかもしれないが、ここでは戸主（戸）の〈本名〉と百姓名体制とが結びつく根拠はないので速断はひかえたい。

註

- (1) 『鎌倉遺文』第三〇巻、第二二八〇一号文書（以下同様に、鎌倉遺文三〇―一二八〇一というように略す）
- (2) 『平安遺文』第一巻、第二二八三号文書（以下同様に、平安遺文一―二八三というように略す）
- (3) 平安遺文一―二一八
- (4) (5) 鎌倉遺文三〇―一二八三〇
- (6) 鎌倉遺文三〇―一二八三三
この史料と関連する「恒吉戸田注文」（同年銘のものと考えられている）に「恒吉戸田四町二百歩」とみえるが、一〇〇歩の違いがある。この違いのみでなく、条里坪でも差異がある。すなわち、同恒吉戸の授田注文写の「□野三条田人所 五坪一段一百三十歩」と「比郡四段百二十四歩」の文言は「恒吉戸田注文」にはない。また、同注文にある「九堺里十六坪一段」の文言は授田注文写にはない。このように授田注文写と「恒吉戸田注文」（鎌倉遺文三〇―一二八三四）との間には記載に相違がみられる。
- (7) 鎌倉遺文三〇―一二八三五
- (8) (9) 鎌倉遺文三〇―一二八三六
- (10) 鎌倉遺文三〇―一二八一
- (11) 鎌倉遺文三〇―一二八三〇
- (12) 鎌倉遺文三〇―一二三一九八
- (13) 鎌倉遺文三〇―一二三二一六
- (14) この史料以外にも同年月付の「審門申状」にも「為佐田藏人公益并河内房已下輩背□序宣」「打入当寺領本名吉永戸田百姓宮王大夫永真并石王次郎等住宅」という同様な記載がみえる（鎌倉遺文三〇―一二三二一五）。
- (15) 鎌倉遺文三六―二八三四八
- (16) 平安遺文五―二三〇七
- (17) 鎌倉遺文一四―一〇七四〇
- (18) 平安遺文一―二五七
鎌倉遺文二〇―一五六五三
この史料にみえる伊賀国の御封と荘園に関する記載以外の諸国の御封・荘園と荘園に関する記載は、各国ごとに「東大寺注進案」という同じ標記である（註(19)・(20)の史料を含めて、鎌倉遺文二〇―一五六五〇―一五六八三は同様である）。
- (19) 鎌倉遺文二〇―一五六五八
- (20) 鎌倉遺文二〇―一五六五九
- (21) 鎌倉遺文二〇―一五六六〇
- (22) 鎌倉遺文二〇―一五六六一
- (23) 鎌倉遺文二〇―一五六六二
- (24) 鎌倉遺文二〇―一五六六三
- (25) 平安遺文五―一二七二
- (26) 鎌倉遺文三三―二五〇〇〇
- (27) 平安遺文七―三二二六

結びにかえて——中世後半の封戸田の戸主・戸と法会の戸主・戸の語り

律令国家体制での戸主・戸と俸禄制の封戸は、律令国家崩壊後も荘園公領制社会の中で存在し続けてきたことを提示してきたつもりであるが、〈公領制〉の実態をはじめ、いくつかの課題が内在していると考えている。

まず、戸主・戸と田堵との関係で、すでに掲げた承徳三年の「左衛門少志中原資清勘文案」の「承和十二年十一月十五日国司進相博田官符請文副文四通」にみえる「一通、多氣郡飯野両郡司下田堵戸主^{有郡判等}」の文言と、三五年ほど後の長承二年の「伊勢国大國莊田堵住人等解」の「是以自延喜班田之時以来戸与莊各数百歳之間、無相論所令領掌来也、而今彼戸主等背旧領圖合坪坪巧横惑、為押取当莊領能田」「被停止戸主等非道之妨者」という記載は田堵が戸主ではなく、田堵と戸主らとの係争（戸主らの非道）を表現していることは確かである。しかし、従来より田堵と戸主とのかわりは、「三の君の夫農耕」にみえる「三ノ君ノ夫ハ、出羽ノ権ノ介、田中豊益ナリ。偏ニ耕農ヲ業ト為シテ、更ニ他ノ計ナシ。数町ノ戸主、大名ノ田堵ナリ」という記載をもとに戸主＝田堵という認識となつたと考えられる（当方も田堵の論究では短絡的に戸主＝田堵と言及してきた）。三の君の夫について記載している〈大名田堵〉へ生成していく基本的条件とは〈権ノ介〉であり、〈数町歩領掌〉の田地の〈耕農〉を業とする〈戸主〉であるという条件を十分に満たしている戸主が田堵に成長していくと読み取るべきかもしれない。

次に封戸（御封）と戸主・戸との関係について、すでに示した田堵と戸主らの係争の史料および伊勢国法常住院領に表示されている戸の戸田の史料、さらに東大寺封戸（御封）・莊園に関する史料から、一三世紀後半に至るまで封戸や戸主・戸が存在し続けたと考えられる。さらに、一四世紀前半の史料によるかぎり、すでに前述して掲げた史料である宇佐宮神領であった田地二段余についての下知状案には封戸郷田地と明示していた。この案文以外にも、元亨三（一三三三）年八月二十九日付の「称惠讓状」にも「下総国相馬御厨内発戸本給一町（割註略）并中ノ

代内事」という文言に発戸とみえる。また、時期が少し遡るが、文永七（一二七〇）年十一月二十六日付の「大中原隆薩田地去文」の「永避渡今虫戸授給宇治郷所在下田字稲月田地一段事」の文言に今虫戸が窺える。一三世紀後半から一四世紀前半にかけてこれらの史料から封戸郷・封戸と戸の存在が窺える。また、「職」付帯・表示の史料は前述したとおり、徳治二年の「貞清重行作手職請文案」の「法常住院御領常吉戸田百姓・重行請文事」「件戸田者、無諸万違乱、（中略）、若有限所当并三分□公事等対捍之時者、可被替作手職者也」という記載がそれであり、常吉戸の戸田の百姓二人に所当公事の弁済を条件に作手職を付帯させたのである。

ところで、正和五（一二一六）年正月三日付の「宇佐宮年分度者度縁案」の「豊前国宇佐郡封戸郷・主・幸景戸、口田部字^{（年一）}□」「八幡戸人毎^{（年一）}□人、宜令得度入彼国弥勒寺」という記載と、元亨二（一二三二）年正月三日付の「貢進上当年々分度者三人事」「二人 封戸郷戸主宇治幸景戸口宇佐千陀羅丸」という文言^{（8）}などの封戸郷戸主の戸口が宇佐宮年分度の得度に名を連ねていることは、宇佐宮神領の豊前国宇佐郡の封戸郷に〈戸主〉と〈戸口〉が存在していたことを語りかけているが、二・三の史料のみでは速断しがたい。

このように律令国家崩壊後、一四世紀に至るまで戸主や戸（戸口）は存続し、同様に荘園機構化しないで封戸（御封）として存在し続けたと理解し得るが、もう少し検討すべきであり、ここで示した課題も内在していることと併せて〈公領（制）〉の実態究明の必要性を提示して結びとしたい。

註

様にて、鎌倉遺文三七―二八四九七のように略す

- （1）『平安遺文』第四卷、第一四〇七号文書
- （2）『平安遺文』第五卷、第二二七二号文書
- （3）藤原明衡・川口久雄訳注『新猿樂記』
- （4）『鎌倉遺文』第三七卷、第二八四九七号文書（以下同）
- （5）鎌倉遺文一四一―一〇七四〇
- （6）鎌倉遺文三〇―一二三一二一
- （7）鎌倉遺文三三―二五七一二
- （8）鎌倉遺文三六―二八三〇二D